

解答例

問一

- ①怠惰 ②行使 ③可視化 ④競合 ⑤疎外 ⑥択一 ⑦蓄積 ⑧挫折 ⑨強要 ⑩干渉

問二

インスタグラムなどのSNSにより、誰でも自己表現の場を持てるようになったが、そのために他者との競争が生まれ、その競争に勝てなかった者は挫折感を味わうことになる、ということ。(八六字)

問三

本来、何かに縛られないものが「自由」であるにもかかわらず、他者との相対的な関係の中で、社会の一般性から逸脱し、卓越した存在にならなければ自由を得られないという、矛盾した関係にあるという事態。(九五字)

問四

〈私〉の欲望は他者によって承認される必要があるが、そのためには、〈私〉の欲望と他者の欲望が一致している必要があるから。(五九字)

問五

自己と他者が互いに存在を認め合うことが「承認」であり、他者に関わらないことが「黙認」であるが、いずれにせよ他者の存在を前提としていることは共通しており、その点において違いはないという点。(九三字)

【第二問 解答例】 出典『落葉物語』（『当代江戸百化物 在津紀事 仮名世説』多治比郁夫・中野三敏校注 新日本古典文学大系 97）

問一 二重傍線部ア「参りなむ」、イ「言ふめる」を、例にならつて文法的に説明せよ。

ア 参り（ラ行四段活用動詞「参る」連用形）・な（完了の助動詞「ぬ」の未然形）・む（推量の助動詞「む」の終止形）
 イ 言ふ（ハ行四段活用動詞「言ふ」の終止形）・める（推定の助動詞「めり」の連体形）

問二 傍線部A「此の願ひ」とは何か。本文に即して具体的に説明せよ。

法隆寺に伝わる宝物の琴を拝観し、形をくわしく記録すること。

問三 傍線部B「とにかくにひきわづらひつ七筋の琴の緒よりも強きころを」の和歌について、「ひきわづらひつ」の部分に用いられている技巧に注意しながら、その内容を、八十字以内で述べよ。

琴の縁語である「弾く」を掛詞に用い、僧のかたくなな心を引く、つまり僧に好意を示してもらうのは、強く張った琴の弦を弾くよりも難しい、という意味を表している。（七十八字）

問四 傍線部C「いかにひたぶるなりと思し貶させ給ひてむ」を本文に即して現代語訳せよ。

どれほど心が狭いのだと軽蔑なさったことでしょう。

問五 傍線部D「自らよき材を選びて、其の式により数面造り出して世に伝へけり」とあるが、源竜がこのような行為をなした理由は何か。本文全体から推量し、三十以内で説明せよ。

古く貴重な琴の姿をそのまま後世に伝え残すべきだと考えたから。（三十字）

解答例

問一 ① もとより ② やや ③ たちまち

問二 ㊶ なんぢ(じ)とやくせん(やくす) ㊷ じをくだきたけをる(おる)がごとし

問三 どこの(出身の)人かわからない

問四 私のために母を養ってくれる人がいたら

問五 鄭五の妻は、母思いの夫の死後、遺言通り義母を養ってくれる人に嫁したが、母の世話を怠ると、

まるで見守る夫がそれを知らせるかのように奇妙な音がした。しかし、今はその義母が亡くなったため、静かになった。

解答例

問一

対面的なコミュニケーションができないために生産性が低下したと言う労働者が多数にのぼる。テレワーク用の端末越しに上司などから過剰な監視や不適切な干渉や理不尽な要求を受けたと訴える声も数多く聞かれた。(98字)

問二

異質な知識、技術、立場の人を受け入れるチームを作り、一人ひとりが仕事を分担して、共同性の中で自然とできる序列も無意味にすること。(64字)

問三

役割を明確に分けずチーム一丸で業務に当たる職場共同体の風土は、テレワークへの適応を困難にする壁である。新規来住者を分け隔てたまま地域活動への関与は期待し、都会の生活様式を受けつけない地域共同体の風土は、テレワークを織り込んだ地方移住への希望を打ち砕く壁である。(130字)

問四

効率性の論理は、同じ仕事をより短い時間でこなす社員の能力を高く評価する。それに対し共同体の論理は、度重なる転勤や長時間の残業を受け入れて耐え抜いた社員の苦労や犠牲に厚く報いるのを公平とみる。日本の職場では共同体の論理がつねに優勢であるため、効率性の向上をめざす改革がほぼ例外なく阻まれるということ。(149字)